A R P A K ・ N E W S L E T T E R

アルパック ニュースレター

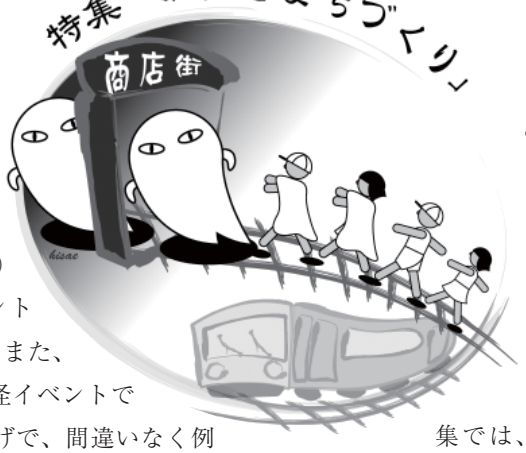
VOL163　2010 年 9 月 1 日　ISSN 0918-1954

今日も妖怪が愉快に走ります。水木しげるの生まれ故郷「境港」と「米子」を結ぶ JR 境線
（本文中に関連記事があります）

目次／contents

特集「妖怪とまちづくり」 ･････････････ 2
・水木しげるロードのはなし～その誕生と成長／依藤光代
・京のまちに今年も妖怪電車が現る／中村孝子
ひと・まち・地域 ･････････････････ 5
・素人の都市計画・玄人のまちづくり（続編）／堀口浩司
きんきょう ･････････････････ 9
・近況「8 月」／三輪泰司
・若手所員・職員による勉強会を開催しています！！
／山﨑裕行・江藤慎介
うまいもの通信 ･････････････････ 10
・須磨水「ぷくぷくサイダー」／岡崎まり
メディア・ウォッチ ･････････････････ 11
・『水木しげる・妖怪大図鑑』／岡本壮平
まちかど ･････････････････ 12
・リアルにレトロに地域情報を発信する「まちかど情報板」
／中塚一

特集「妖怪とまちづくり」



今年はＮＨＫ朝の連続ドラマ「ゲゲゲの女房」の影響もあってか、（境港だけでなく）各地で妖怪にちなんだイベントがたくさん開催されています。また、恒例となりつつある地域の妖怪イベントでも「ゲゲゲのブーム」のおかげで、間違いなく例年より妖怪が活躍したことでしょう。

怖い怖い妖怪は、連日続いた猛暑を吹き飛ばす効果があるだけではありません。

地域や商店街の活性化に一役買うという重要な役割も演じています。今号の特集では、各地で元気に活躍した「妖怪たち」をご紹介します。

水木しげるロードのはなし～その誕生と成長／大阪事務所　依藤光代

田舎の商店街での怪奇現象

鳥取県は弓ヶ浜半島の北端に位置する、人口3.5万人の境港市では、年間170万人を超える観光客が訪れるという特異な現象が起きています。2009年の一年間をかけて、現地の方々にお世話になりながら修士論文のための調査を行い、関係者へのヒアリングと新聞記事を掘り起こすことによって、「水木しげるロード」（以下、ロード）ができたころからの様子を把握しました。その結果をもとにロードの躍進の過程を、土台が形成される時期にフォーカスして解釈してみたいと思います。

JR境港駅に降り立てば、水木しげるロードと名づけられた約800ｍの商店街の始まりで、歩道には妖怪をかたどったブロンズ像が130体ばかり並んでいます。ひとつひとつが彫刻家と水木しげる先生の手によって細部までこだわって造られたもので、かわいいものから世にもおそろしげなものまで、表情豊かな妖怪たちです。どの像もどこかしらブロンズがはげてしまって金色にかがやいている部分があるのは、訪れる観光客の多さと、触れられ親しまれている様子を物語っています。

ブロンズ像

なぜ小さな商店街の観光客数がここまで伸び続けたのか。ブロンズ像の大きすぎない絶妙なサイズや完成度の高さは重要な要素で、またアニメや映画等のメディアで「ゲゲゲの鬼太郎」が取り上げられたことも無関係ではないでしょう。ロードができる前から店をなさっている商店主の方々は口々に「さびれた商店街が活気づいたのは、妖怪たちのおかげ」とおっしゃいます。しかし、見落としてはならないのがこの地元商店主の方々なのです。

妖怪が観光客を連れてやってきた

商店街に妖怪を連れてきたのは、市の職員でした。妖怪ブロンズ像の設置は、商店街を貫通する都市計画道路の歩道を拡幅し、シンボルロードとして整備する事業の一環で行われました。「境港出身である水木しげる先生の漫画をモチーフにしよう」という提案には、「さびれた商店街に妖怪なんて」と地元は誰も賛成しません。しかし職員が粘り強く何度も説明を行うことで、商店主らの何人かが理解を示すようになり、1992年に事業はスタートしたのです。ブロンズ像が設置されると、すぐに市の内外から観光客がやってくるようになりました。そこで商店街として、せっかく来てくれる人がいるのだからと無償で地図を配布したり、手作りの土産品を販売したりと、1993年ごろからもてなしの対応を始めます。また、ブロンズ像が一通り設置された1994年には

にぎわうロードの様子

「完成記念式典」が開催され、ロードでの会場設営が市から商店街に委託される形で、地元商店主たちが市と一緒になって盛り上げました。

1997年には地方博覧会という市を挙げてのイベントの時期とも重なり、観光客は増加していましたが、一方で市の財政は思わしくなく、建設が心待ちにされていた「妖怪博物館」を断念せざるを得なくなりました。市と共にロードを盛り上げてきた商店街の機運も、連動してしぼんでしまいます。

妖力結集し大躍進

この逆境に抗い、立ち上がった人々がいました。商店主をはじめとする26人が、商店街の組織とは別に、新しく「水木しげるロード振興会」という任意の組織を結成し、ロードをさらに盛り上げていこうと活動を開始します。1998年に結成後、すぐにブロンズ像の説明を加えた詳細な地図を作成し、また手作りの様々なイベントを多数開催しました。1999年には県の商工系の補助金を活用し「商店街活性化基本計画」を策定し、水木しげるロードの将来像を描きました。さらに同時期に水木しげるロード振興会のメンバーのうち7人で株式会社を設立し、活性化基本計画に書き込んだ事業の一つである「妖怪神社」を2000年に建立することまで成し遂げてしまったのです。

その後2003年には市が、商店街の駅とは反対端に「水木しげる記念館」を完成、また2004年には観光協会が中心となって資金を全国から募り、ロード内にブロンズ像40体を増設しました。このように、逆境を超えて築かれた土台の上にさらなる整備が進み、800 mの商店街は空間的なまとまりを持った一つの観光地となりました。

妖怪に魅入られた人たち

発足時点での水木しげるロード振興会のメンバーは、商店主全体の内の3分の1程度でした。中でも中心となって情熱を傾けた人々を見てみると、手先が器用な人が多く、ロード完成当時に率先して手作りのお土産を作成しています。また肩書き云々というよりは、観光客と交流するのが好きであったり、周辺の商店と仲良しであったり。そんな人たちが、ロード完成初期にみんなで行ったイベント等で、一緒に汗を流しながら情熱を共有し、そして1997年ごろの市の財政難という逆境に対して「自分たちがなんとかしなければ」という心をひとつにし、力を合わせることになったようです。

ここで、妖怪を商店街に連れてきた市の職員は、その後も頻繁に商店街に通い、逆境時には商店主らに交じって共に行動を起こし、活動の中心を担ったことは注目できます。情熱の火薬が詰まっていたところに、導火線に火をつけ、さらに計画策定や事業実施のスキルを用いて大きく花火を打ち上げた役回りと言えましょう。

異彩を放つ商店街として

水木夫人著の「ゲゲゲの女房」がドラマ化され、今年もアツい夏となった水木しげるロードですが、今後どのように追い風を利用し、また逆風を乗り越えるのか、地方の商店街の中でも異質で怪しい輝きを放つ水木しげるロードから目が離せません。

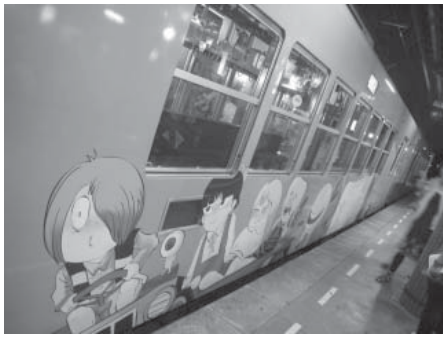
京のまちに今年も妖怪電車が現る！

／大阪事務所　中村孝子

夏は暑いものだけれど、今年の暑さは格別であった。まとわりつくような蒸し暑さを気分的に少しでも吹き飛ばそうと、京都の街中を走り抜ける嵐電（京福電鉄）「妖怪電車」に乗ってきました。

この「妖怪電車」は、2007年夏に京都で世界妖怪会議とやらが開催された際に妖怪イベントの一つとして、運行を開始しました。私が初めて乗車したのもこの年で、好評のために毎年運行され、私的には夏の風物詩の一つとなりつつあります。

今年の運行期間は、8月20日～29日で、夕方から9時過ぎまでの間に嵐山駅～四条大宮駅（もしくは北野白梅町駅他）間を一日7本（臨時電車）運行していました。そろそろ日が暮れ始めようとする7時過ぎに四条大宮駅で嵐山駅行きの「妖怪電車専用



化け電（ゲゲゲの鬼太郎のラッピング電車）

電車券」を200円（子どもは100円）で購入し、三脚持参の撮り鉄や子ども連れの家族が大勢いる中、待つこと30分。ホームに車両内部が妖しく光る「化け電（ゲゲゲの鬼太郎のラッピング電車）」が、すーっと現れました。車両は2車両で、照明を落とし代わりにブラックライトを使用しているので、妖しく青白く光っています。車両内部は、吊り広告部分に妖怪の絵が飾られ、化け猫の鳴き声のような効果音が反響するなど、照明だけでなく怖さの効果をあげるために数々の趣向がこらしてあります。途中で、一瞬、ライトが全部消えたのですが、これも演出の一つだったと思います。

そして、妖怪。ざんばら髪、白髪のカツラや浴衣を着ていて、お面をかぶっているとはいえ、その形相は相当怖いものがあります。ほぼ満員の車両内を妖怪は、終始練り歩き、乗客の顔をのぞき込んだり、子どもをだっこして記念撮影に応じたり、考えようによってはサービス精神旺盛な妖怪たちです。

さて、乗客の反応はというと、子どもは恐怖のために泣き叫んだり、笑いころげて握手を求めたりその反応はまちまちです。一方、大人はといいますと、その様子を見て笑ったり、記念撮影をしたりで怖がるどころか余裕で楽しんでいます。

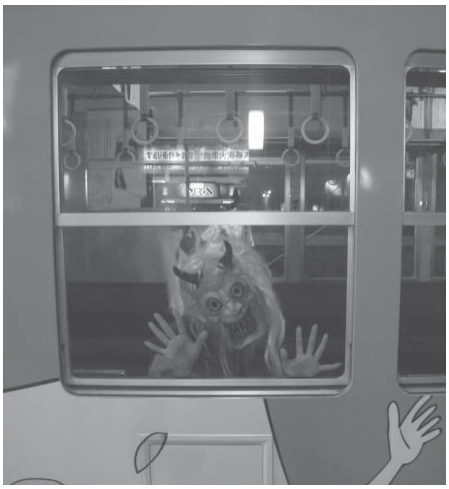
私が事前にキャッチしていた情報では、各車両には妖怪が2匹ずつ乗車するはずだったのですが、いざ乗車してみるともっとたくさんの妖怪がいました。実は、妖怪に扮装して乗車すると運賃が50円になるという企画で、浴衣を着たキツネの妖怪、猫の耳としっぽがはえている化け猫の妖怪などは、たぶんお客さんだったと思います。妖怪に扮装すると乗車記念に「妖怪認定書」ももらえるらしいので、来年は挑戦してみようか目下のところ考え中です（笑）。とにかく、乗車時間はわずか30分程度ですが、何故か途中からみんなで楽しんでいる一体感みたいな雰囲気が漂ってきて不思議な気分になります。

残念ながら、時間の関係上、参加はできませんでしたが、お盆休みには東映京都の女優さんの朗読による「怪談電車」の運行や「妖怪仮装コンテスト」があったり、さらには妖怪ストリートで有名な「大将軍商店街」と連携したイベントが開催されるなど、その他にも妖怪の企画が盛りだくさんだったようです。また、友人の目撃談によると、嵐山電鉄は、一部路面電車なので、夜に走る妖怪電車の姿もなかなかおもしろいそうです。来年は、このあたりを攻めてみようかとも思っています。

暑さを吹きとばすつもりで行ったのですが、笑いで吹き飛ばされたという、なんとも楽しい夏の時間を過ごせました。来年も運行されると思うので、皆さんもいかれてはいかがでしょうか？

妖怪と怖がる子どもたち

大迫力の形相



帰りも車内から妖怪のお見送り

素人の都市計画・玄人のまちづくり（続編）

堀口　浩司

2007年秋のアルパックニュースレター（145号）で、都市整備や行政の計画づくりに市民参加が当たり前になった時代にあって、都市計画の職能確立、専門家の役割はどうあるべきかについて述べました。前編は「素人でも判るような都市計画にするのが、専門家の役割」というべき内容でした。何人かの読者から反応があり、後編として「まちづくりに関わるプランナーの役割」を書かねばならないと思いつつ、その間の激しい変化に追随できず、ついつい先延ばしにしておりました。この３年近くの間に、コンサルタントを巡る環境も大きく変わりつつあるので、この間の変化を振り返ると共に、今後の方向性について考えてみました。

都市計画のスキルアップ塾ー初級プロ講習

都市計画学会関西支部で2007年と2008年にスキルアップ塾を開催しています。初年度は①GIS研修、②基礎調査編（現地踏査、アンケート、統計処理）、③ワークショップ技術です。２年度は①と②だけを実施しました。参加者は学会の個人会員あるいは団体会員に限定されており、行政とコンサルタントの若手職員に基本的なスキルを紹介することが目的です。比較的汎用性の高い②基礎調査編と、アプリケーションの使い方に徹した① GIS講習編は結構人気がありました。一方、ワークショップ研修については、既に既存文献が充実しているのか、使い方や使う場面のイメージが乏しいのか、集まりが悪く１回で講習を終えました。スキルアップ塾は、あまり理念的な研修にせず、基礎編として最低限必要な知識や技術、習っておいて損にならない内容に絞っているので、それなりに人気がありました。

会員のコラボレーションによる
都市計画スキルアップ塾

A. まちづくりコース
B. 都市調査・分析コース
C. GISコース

さらに詳細な内容や技術の習得という段階に進むには、「習うより慣れろ」と言うように練習時間や反復練習も必要であり、その時々に現場で下す判断も重要なため、研修医や司法修習生と同様、現場でのインターン期間が必要になります。求められる内容や技術が日々変化する中では、その時々のOJTでしか伝えられない技術が多くなります。

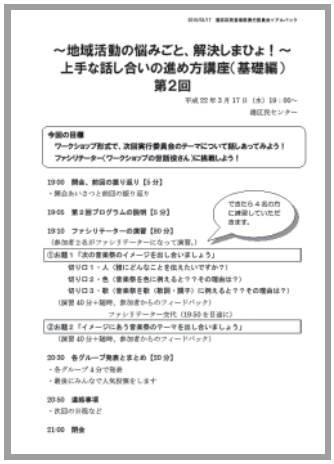
市民にワークショップを教える（大阪市での経験）

大阪市では、市民グループや活動団体を直接支援する制度として、講師派遣制度をもっており、あまり元気が出ない町内会の活動、上下関係もあって「なかなか話がはずまない」、「もっと自発的な意見が欲しい」といった悩みを抱えている市民団体むけに「話がはずむ会議のファシリテーション講座」なるものを開催しています。その流れの中で、2008年にはさまざまな活動団体のグループリーダー向けに、2009年には区民音楽祭の実行委員会を構成するコーラスグループのコアスタッフ向けに「ファシリテーション講習会」をやるべく派遣されました。２～３時間の体験講座を３回実施しました。

ワークショップのファシリテーション技術を直接住民団体にレクチャーすることになりました。これまでコンサルタントや行政が市民を相手としたワークショップを開催し、我々が意見をまとめる段階から、対話の道具として市民自らがワークショップを切り盛りする時代になりつつあります。

このようにワークショップやラウンドテーブルなどのコミュニケーション技術は、日常的な地域活動、市民活動の現場で使われる段階になっており、時には不慣れなコンサルタント以上に経験豊かな市民もいるかもしれません。

このように我々の仕事も日々進化しており、その


～地域活動の悩みごと、解決しまひょ！～
上手な話し合いの進め方講座（基礎編）
第2回
平成22年3月17日（水）19：00～
港区民センター

今回の目標
ワークショップ形式で、次回実行委員会のテーマについて話しあってみよう！
ファシリテーター（ワークショップの世話役さん）に挑戦しよう！

19:00 開会、前回の振り返り【5分】
・開会あいさつと前回の振り返り

19:05 第2部プログラムの説明【5分】

19:10 ファシリテーターの演習【80分】
（参加者3名がファシリテーターになって演習。）

で出たら4名の方に練習していただきます。

①お題1「次の音楽祭のイメージを話し合いましょう」
切りロ1・人（誰にどんなことを伝えたいですか？）
切りロ2・色（音楽祭を色に例えるとナニその理由は？）
切りロ3・歌（音楽祭を歌（歌詞・調子）に例えると？？その理由は？）
（演習40分＋質問、参加者からのフィードバック）
ファシリテーター交代（19:50を目途に）
②お題2「イメージ2にある音楽祭のテーマを話し合いましょう」
（演習40分＋質問、参加者からのフィードバック）

20:30 各グループ発表とまとめ【30分】
・各グループ4分で発表
・最後にみんなで人気投票をします

20:50 連絡事項
・次回の日程など

21:00 閉会

中でコンサルタントやプランナーの役割も大きな変化を遂げつつあります。

まちづくりプランナーの職能についての考え方の変化について

私の駆け出しの頃、弊社の先輩である堅田さん（故人）が、「コンサルとは、コンと鳴いて、さっと去る」と言っていたのを思い出します。昔は地域づくりに熱い情熱を持ちつつも、客観的な立場で正論を述べて、後は「皆さんで頑張りましょう」といって爽やかに立ち去るといった立場だったのです。

ところが時代の変化と共に、我々の仕事も変化してきます。口先だけで提案しても迫力がないし信用されないので、「PLAN」から「DO」への関わりが一般的になってきました。調査し、計画を作り、きれいな報告書がまとまりました、それだけでは、地域は変わりません。コンサルタントも地元や行政の人と一緒に汗をかき、一緒に活動することがあたりまえになってきました。

地方でのコンサルタントの仕事と、中央の政策シンクタンクの仕事には決定的な違いがあって、前者はどこでも使える万能薬より、個別の事象や問題解決に効く特効薬を常に求められています。後者は政策調査の場合には、特殊解よりは一般解で汎用性のある方向付けを、ベーシックな基礎調査の場合には丹念に掘り下げた実態把握を求められます。アルパックの仕事の多くの部分は、地方の問題を扱うことになりますから、前者の要請が強く、地道な調査の中からその地域の問題を発見し、解決の方向を示し、具体的で段階的な技術的解決策を提示し、時には自ら実施を担うというソリューションビジネスだと思います。

「笛ふけど踊らず」なら「踊らにゃ損」

最近は、地元が踊らないのに、コンサルタントだけ踊っているのでは、という局面もあります。これってどういう意味があるのでしょう。市民の関心や取り組みの意欲がまだまだなので、その活動の必要性や達成したときの満足、協働で取り組むことの楽しさ、といった事を先行的・明示的に演出し、理解を助け、活動の雰囲気を作っていく。一種の撒き餌のような効果を担っている場合もあります。

コンサルタント自身も、これは仕事なのか遊びなのか良く判らないまま、面白いと思ってやっている筈です。

私自身の経験でいえば、かつて自分が住む町で「まちなみ会議」という組織が発足する段階で一緒に活動しました。その時に「私は職能を確立するべき立場で頑張ってきたのに、この活動を無償でする意味は？」「他の自治体からはフィーをとりながら、ここはボランティアでいいのか？」といった事柄を考えました。その時は「自己満足が得られる」「この活動の初動期には専門的リードが必要」「自分の住む町が良くなれば、自らにも利益がある」という理由で、その準備段階の１年間だけ一市民の立場で活動しました。

まだ、プロボノ（Pro Bono Publico = 公共善のために）のような関わり方が理解されていない時期でしたので、専門家である私が個人として関わることにためらいがあった訳です。結論からいうと「自分の技術開発にも役立つ」「他の現場でも使えるヒントがある」という実利もありました。アルパックであれば当然使えるべき道具や環境もない、強いリーダーを作らずフラットな組織の一員として意見を集約し発表する状況を作っていく、いわば野戦病院の技術や心構えができました。

ただし、やってみると私にとっても面白いし達成感もあるのですが、あまり手際よくやりすぎると「他の地区でも（手助けなしで）同じことができるか」「きれいに作りすぎて、それが標準型に思われると後が続かない」など、市民活動として続けて行くための配慮が必要だと思っていました。単に、手を抜いているだけと思われるかも知れませんが、教育と同じで、できるかできないかギリギリのところまで見極め、それ以上は関与しないというのが良いだろうと今も思っています。専門家はまちづくり組織や関わる人を育てるべきで、活動そのものを育てるのは市民や企業など「活動家」の役割であると考える訳です。

職能の確立はトラウマか

都市計画コンサルタントという職業がスタートして約50年以上になりますが、元々ベンチャービジネスのようなもので、仕事内容を固め、ちゃんとしたフィーを貰い、組織として継続的に維持してゆく、まさしく職業として確立するための試行錯誤を繰り返しています。その中で都市計画コンサルタント協会などが中心になって、専門的な調査・計画・調整・助言に対する適切な費用を頂戴するという実績を作ってきました。では「まちづくり」はどうでしょうか？市民参加の必要性については認識されつつありますが、専門的技術の内容や性能、効果と評価のシステムはまだ萌芽段階にあって、時間当たり幾らといった計算方法が一般的ではないでしょうか？（勿論、経験を積んだ人なら30分で判ることが、経験の少ない人なら何時間もかかる場合もありますが）

「まちづくり」が住民運動や反対運動の解決策、あるいはハードな市街地整備のための合意形成の手法として出発し、阪神・淡路大震災以降は言葉としても市民権を得る一方、便利な言葉として勝手な解釈がすすみ、都市計画領域からはみ出て、さまざまな分野の人が使う言葉になりました。専門領域として扱うには広すぎて、ほとんど手に負えなくなりつつある状況です。

最近、プロのコンサルタントやシンクタンクの人が、自らまちづくりの担い手となって直接関与する例が多くなっています。さらには仕事以外の余暇時間を利用して専門的技術を活用する「プロボノ」といった関わり方も注目されつつあります。

これにはさまざまな背景があります。第1はまちづくりコンサルタントの仕事の総量が縮小傾向にあることです。多くの場所や地域では問題を抱えつつも、それを解決するために人を雇う、事業を進めるといった資金調達の手段が確立されていないことに起因します。これまでとは異なり、まとまった事業費を税金から投入することができないために、資金を集める手段が無いことです。もちろんBID（Business Improvement District）やTMOなどの仕組みも検討されつつありますが、超のつく付加価値を持った一等地を除けば、経済行為としてのまちづくりを完結させる手段がないため、コンサルタントしたくても（雇いたくても）活動資金がない、そのため他に生計を持った人に手伝ってもらうことになります。

第2の背景は、企業のCSR活動などの理解が深まり、その会社の本業に関与しないかぎり、自由時間を使ってNPO活動や地域活動を支援する環境が整ってきたことです。さまざまな業界、業種の中で法務、税務、会計などの専門家はいますし、空間づくりだけを目的としないまちづくりの分野であれば、他の業界の方の力を発揮することもできます。逆に本業と近いと、営業行為や利益誘導と見なされかねないので、関わりが難しいと聞いています。

第3の背景は、純粋なプロボノではなく、本来プロとしての活動を「趣味」「技術開発」「PRや営業」といったさまざまな自前の理由によって、参加することです。

コンサルタント業として事務所を開設するには技術士資格が必要ですが、既に有資格者の居る会社で契約し、その社の信用で仕事をすれば、特に資格がなくてもコンサルタントの仕事をすることは可能です。多くのプロは専門的な技術の有無が問われるだけで、本来的な職能として確立するのは多くの実績と時間、世間の理解が必要です。

専門家が直接まちづくりに関わる意味。専門家の役割

専門家が自ら活動家としてまちづくりに関わるモチベーションと役割について、少し整理しました。1960年代のアメリカにおいて、肌の色や言語の異なるマイノリティ相互の合意形成や計画参加の必要性から市民参加が始まり、多様な意見や価値観を市民と共有するのが、まちづくりの基本条件となっています。その頃から比べれば、まちづくりの概念も日々変化していますし、多様な意見もあるでしょう。あくまで私の今日的な理解ということでお聞きください。

①楽しみとしてのまちづくり参加

我々のようなコンサルタント業界に入ってくる人は何らかのこだわりや自己実現の目標を持っている場合が多く、現場でまちづくりの活動支援をやっていると「儲からないけどそれなりに楽しい」ことが多いわけです。したがって夜遅くまでなかなか家に帰らない、家族にあきれ顔をされながらも日々あれこれと仕事で悩んでいます。幼児期に日が暮れるまで遊んでいる子供のように、（すべての仕事ではないが）自己満足でやっている部分も否定できません。地元から見れば、やる気のあるコンサルタントをうまく利用しているとも言えますし、地元の人から充分な理解と信頼を得られないとコンサルタントの自己満足に付き合わされている（振り回されている）と思われることもあります。物事の功罪は簡単に判断できません。個人的な思い込みや自己実現の意欲もないと「やる気」が出てきません。

②新しい業務分野の開拓と技術革新

まだ仕事として萌芽段階にあって、仕事になるかどうか判らないが、とにかく地域に何かしら問題があってその解決方法を探していく中で、何か有償の仕事になるかもしれない。見込みが薄いが何らかの打算と自らの関心でまちづくりに関わる。やっている内に技術的な発展もある。ニーズがあればいずれ仕事になる筈というベンチャースピリッツで新しい地域課題に取り組んでいくことがあります。この分野での実績づくりや成功体験を他の地区で活用することにもなります。

③先行投資、営業活動

仕事の内容として特段新しいテーマではないが、これまで取り組むチャンスがなかった若手コンサルタントや設計事務所が登竜門として関わる。実績や信用の乏しい零細事務所、駆け出し時代のコンサルタントが自らの実績づくりや営業活動として関与する。もし成功すれば、この実績を元に、他の地区では有償で関わる。といった個人レベルの取り組みです。（当然ながら既に実績のある大企業のスタッフほど外に出なくなる傾向がある）

プロのコンサルタントは、まちづくりを支援することが本懐

まちづくりの専門家とは、「まちづくりをする人や組織を支援する」、「まちづくりを進める上で必要な状況や仕組みを用意する」人のことだと思います。自らまちづくりをする人は「まちづくり活動家」と呼ぶべきであって、専門的技能はあるかも知れませんが、少なくともプロではありません。例えば、NPOでしょう。コンサルタントという職業がまだ世の中によく知られていなかった時代から、職能の確立に取り組んできた時代の人間としては、「プロのコンサルタント」ではないように思います。職能としてはなんらかの経験や技術をベースに、技術的なサービスの対価として相応のフィーを頂戴しないとプロとは言えない。専門的な知識やは技術があってもノンプロフィットで活動している人とは大きな断絶があると思います。ただし、ある人が時と場合によって、その立場を変化させるプロボノのような活動が今後増えてくることは間違いありません。

コンサルタントもプロをやめれば、どうなるかってつっこまれそうですが、廃業する、定年を迎える、あるいは他の仕事につくこともありますから、その場合は活動家か、ただの人になることになります。また、まちづくり活動を通じて、別のサービス業で生計を立てる場合もあるので、その場合は「まちづくりビジネスマン」というのでしょうか？「コンサルタント」としてではなく、仕事として世の中のお役に立つ現業やサービス提供をする場合もありますから、「まちづくり仕事」と普通のまちの仕事とどう異なるのかも気になります。単にベネフィットを得ないというなら、文字通りNPOですね。職能論と経営論と一緒にすると、話が混乱してきます。紙面の都合もあるので、このような「まちづくりビジネスのセカンドステージ」については、次の機会に考えてみたいと思います。

（東京事務所長　兼　名古屋事務所長（7月より兼務））

近況「８月」

取締役相談役／三輪　泰司
（NPO 平安京・代表理事）

８月 27 日で満 79 歳になりました。８月・葉月は「平和祈念・推進月間」です。

核なき世界へ

今年の広島・長崎の平和記念式典には、原爆投下国アメリカと核保有国である英仏の初参加があり、過去最多の国の代表が参列したそうです。アメリカのルース大使は式典後、「私たちは核兵器のない世界の実現を目指し、協力しなければならない」と声明を発表しました。

近年、広島の平和記念資料館、長崎の平和公園・原爆記念館を訪問される国家元首級の賓客が増えているそうです。

アメリカでは原爆投下正当論が多数であると言います。「謝れ」「正当だ」の議論はさておき、まず、核エネルギーを兵器に使うことはやめることからです。核兵器のない世界は、人類すべての願いです。そして、事実は日本にあるのです。

事実を見る

1987 年７月、小谷隆一ガバナー（京都商工会議所副頭取）の時から３年間、私は、国際ロータリー第 2650 地区の国際青少年交換委員長を勤めました。２年目の夏から、受入学生のためのエクスカーションを始めました。本当は平安建都 1200 年記念関連事業である京都駅ビル改築計画に掛っていて、猛烈に忙しかったのですが、何でもやり出したら徹底的に、のタチです。57 歳で体力はありました。２泊３日で、夏は富士登山（これも強烈なインパクト）、そして冬は「ヒロシマ・ツアー」を計画しました。北半球と南半球では学期が違いますので、冬は１年間滞在して１月に帰るオーストラリア・ブラジルの学生達と、７月に来て半年になるアメリカ・ヨーロッパの学生達とのお別れ会も兼ねています。

「ヒロシマ・ツアー」は、京都を出発して、倉敷のアイビー・スクエアに一泊。翌日広島へ。初めての時、平和記念資料館へ連れて行って、30 分もすれば出てくるのではないかと出口で待っていました。２時間経っても出て来ません。やっと出てきた彼等・彼女達は、目を真っ赤に泣きはらし、ものも言いません。

厳島神社へお参りした後、宮島でのパーティで、学生達が「このツアーは、後輩達のために、続けて下さい」と言いました。以来、地区委員会は、ヒロシマ・ツアーを続けて頂いているそうです。

幽霊のように焼けただれた皮膚を垂らした女学生達。うつ伏せの背が焼けただれた中学生。つい１時間前には無邪気にはしゃいでいたでしょう。一瞬の核爆発は戦闘員も普通の市民も区別なし。

交換学生達のために、日本はアメリカともっと親しくあるべきだと思います。軍事同盟ではなくて「日米平和友好条約」であってほしいのです。

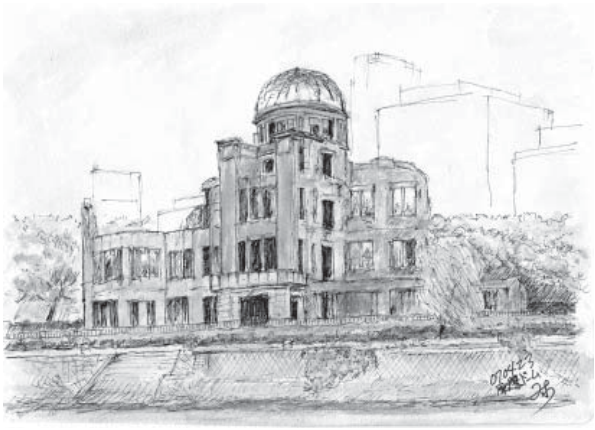
実は「ヒロシマ・ツアー」にはその前のワケがあるのです。

原爆ドーム

1951 年春、学科配当試験をパスし、喜び勇んで建築学科へ入っていきなり遭遇したのは、破壊された広島の街と原爆ドームでした。

京大同学会が企画し、医学部・理学部・工学部学生が原爆の原理から原爆症や破壊力を解説し、建築学生が専らパノラマ模型や、パネルの制作を担当した「綜合原爆展」でした。大学は占領軍の圧力で表向き妨害の姿勢、実際は製図室の使用を黙認。NAU － K（新日本建築家集団京都支部）が作業しました。NAU は戦前戦後通じて最大の建築運動で、初代中央委員長は高山英華東大助教授、丹下健三さんらも会員でした。その後阪大教授になられた岡田光正さんら先輩の指導で、写真をたよりに作りました。20 歳の夏でした。

原爆展は、７月に丸物百貨店（京都市）で開かれました。翌年、幼なじみで経済学部の中村隆一君と広島へ行きました。プラット・ホームからみると駅前はバラックのヤミ市で、その向こうに



原爆ドームが見えました。夜行で長崎へ行きました。浦上のあたりは工場地帯だったのでしょうか。戦後６年も経っているのに、グニャグニャになった鉄骨がまだそのままでした。

その後、原爆展は各地を巡回展示し、散逸していましたが、先年京都南病院院長をされていた河合一良さんら「原爆展掘り起こしの会」の努力で、西山夘三先生撮影の記録写真などが見つかったそうです。以来、広島へ行く度、原爆ドームをスケッチしています。絵は2007年４月、呉・江田島から大津島の回天基地跡へ行った時のものです。絵葉書「日本の世界遺産」シリーズを作る時、収録するつもりです。

若手所員・職員による勉強会を開催しています！！

『次代のまちを考える会』アルパック内事務局／京都事務所
山﨑裕行・江藤慎介

このたび、京都・滋賀の自治体職員、コンサルタント、研究者などの若手有志で、「次代のまちを考える会」という勉強会を立ち上げました。

勉強会では、人口減少や高齢化の進展，自治体の財政悪化など社会状況が大きく変化している中で、私たちの日常の生活範囲である地域の自治や運営のあり方に着目し、「地域の自立とその限界」をテーマに、広く見識を得ることを目的としています。

勉強会を立ち上げた動機は非常にシンプルです。「同世代くらいが集まって、これからのまちづくり・都市づくりのことをアアデモナイ、コウデモナイと話し合う機会って無いよね」ということがキッカケでした。現在は約15名が参加し、月１回のペースで活動しています。

これまでに、講演会を３回、勉強会を５回開催しました。勉強会では、主に講演会に向けての事前学習及び事後学習を行います。講演会では、外部から講師をお招きして、お話をうかがい、議論しています。

【これまでの講演会】
＜プレ講演会＞
テーマ「知恵と人脈を活かしたまちづくりサポートの取組」
講師：京都事務所　石本　幸良
＜第一回＞
テーマ「地域の資源とは何か、地域の可能性をどう引き出すか？りそな銀行のコラボレーションプロジェクト - REENAL」
講師：りそな銀行（りそな総研）藤原　明　氏
＜第二回＞
テーマ「米国における都心のまちづくり－ニューヨークを中心に－ BID 制度と都心のまちづくり事例について紹介－」
講師：京都府立大学公共政策学部　教授　青山　公三　氏

今年一年は、広く知見を得ようということで活動しています。皆様に講師をお願いすることがあるかもしれません。その時は、是非とも、よろしくお願いします。

うまいもの通信

須磨水「ぷくぷくサイダー」
大阪事務所／岡崎まり

夏には「しゅわっ」とあがる炭酸の泡がよく似合います。大人になっていつしかそれはビールで味わうようになりましたが、幼いころは夏祭りや海で見かけるサイダーが、まさに夏の飲み物でした。兵庫県にはそんなサイダーの名店がいくつも存在します。

例えば神戸市長田区にある兵庫鉱泉所では昭和27年の創業時と同じ工程でつくられている「シャンペンサイダー」が今も売られています。その他にも兵庫県の地サイダーとして「ダイヤモンドレモン」（布引礦泉所）、「ありまサイダーてっぽう水」（有馬八助商店）、「姫路城サイダー」（キンキサイン株式会社）などがあります。

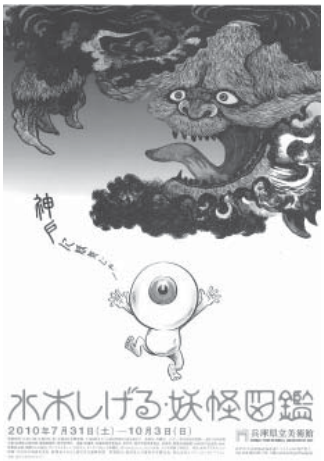
そんな中、神戸市須磨区にも新たな名物として2008年に「須磨水ぷくぷくサイダー」が発売開始となりました。地元奥須磨の天然水「マロッ」を使用し、甘さ控えめな「しゅわっ」とした喉越しが暑い日やお風呂上りにもってこいです。瓶のラベルも海水浴で賑わう須磨らしいかわいいデザインになっています。

MEDIA WATCH

紹介者／大阪事務所　岡本　壮平

アート・イベント
『水木しげる・妖怪大図鑑』

会期：2010年7月31日～10月3日
会場：兵庫県立美術館
http://www.artm.pref.hyogo.jp/index.html



兵庫県立美術館にて『水木しげる・妖怪大図鑑』展が開催中です（10月３日まで）。今年はことさらに暑いのでお化けや妖怪ネタで涼しくなろうという訳か、ＮＨＫ朝ドラ『ゲゲゲの女房』の人気の影響か、美術館の来場者も10万人を突破し、なかなかの盛況ぶりのようです。

「たかが妖怪」「鬼太郎なら子ども向け」などとあなどるなかれ。水木氏の描いた88種類の妖怪の原画が展示されており、その妖怪の生まれや特徴などが解説されています。一つひとつ妖怪を学んでいく（図鑑なので）楽しさもさることながら、驚かされるのはその画力のすごさです。一見すると妖怪の絵に目を奪われがちですが、その背景に描かれている自然の風景や町並みの様子は実に繊細に、木の葉の一枚一枚まで、竹の一本一本まで丁寧に描かれ陰影がつけられており、「とてもペン一本で描いたとは思えない」と感嘆するばかりでした。中には水墨画や点描画にも引けを取らないと思えるようなものもあります。その点ではまさに芸術作品であり、美術館で展覧するのも納得です。

老若男女に人気のようですが、展示を見て楽しんでいるのは大人が多いようです。「あの人は絵として鑑賞」、「こちらは妖怪ファン」、「実は『ゲゲゲの女房』ファン」など、観覧者を観察するのも楽しめます。

最後には（ミュージアムショップというより）お土産コーナーもあり、境港などからの出張販売が好調です。「鬼太郎」の産直といったところでしょうか。

ところで、妖怪の説明によると、人間にいたずらをして喜ぶ妖怪もいますが、人間の恨み、つらみ、憎悪などから生まれた妖怪が意外に多いのです。人間とは別物と思っていたので少々驚きました。妖怪は、人間の内面にある悪や負の部分を、目に見えるように表現したものなのかもしれません。つまり妖怪は人間の本性なのでしょうか。でも、人間には愛情や慈悲・感謝など良や正の面もあるだろうに、それらからからは何も生まれないのかな？などと考えてしまいます。

編集局から

前号に宛先確認はがきを同封したところ、読者の皆さんからたくさんのご意見・ご感想をいただきました。今後の編集の参考にさせていただきます。今後ともアルパックニュースレターをよろしくお願いいたします。

リアルにレトロに地域情報を発信する「まちかど情報板」

大阪事務所／中塚　一

最近、ＩＴ技術が進歩して、コミュニケーションの媒体も電子メールからホームページ、さらにＳＮＳ、Twitter、Ustream 等、アラフィフのおじさんには付いていくのが難しい状況にあります。例えば、先日９月19日に開催された伊丹まちなかバルでは、参加者約5,000人の内、約75名の方がTwitterを活用して、様々な店やまちの情報を約380のつぶやきにより交換されました。（#itamibar でつぶやかれた人の数なので、さらに利用された方は多いかもしれません）しかし、これらのＩＴ技術はコミュニケーションを助ける１つの道具であり、やはり店や待ち行列でお隣になった人と人との口コミ情報交換が、今の所、最も効果的ではないかと個人的には考えております。（技術の進歩により今後、どうなるか分かりませんが）

さて、今回紹介する「まちかど情報板」は、さらにリアルでレトロな地域情報の発信媒体です。「まちかど情報板」は、平成16年度より大阪市天王寺区未来わがまち会議で話し合われている「ふれあいのあるまちにしよう」の活動の一環として実施されています。

現在、どの地域でも同じような事が起こっていると思いますが、色々な地域団体が様々な活動を行っていますが、そもそもその情報が充分に住民に行き渡っていなかったり、マンションなどが建設された場合、住民同士であいさつしたり、地域活動に気軽に参加したりすることが難しくなってきています。このような状況を踏まえ、地域の様々な活動の情報が気軽に分かり、情報を共有化することで、地域のコミュニケーションをもっと活発化していくことが出来ないかと考えられました。

「色々な地域活動団体の情報を一度にパッと見ることができないか？」「インターネットや回覧板、町内の掲示板だけでなく、気軽にまちかどで多くの地域情報を掲示することができないか？」等の課題を話し合った結果、住民の皆さんの目に付きやすい小学校の塀に大きな掲示板（まちかど情報板）を設置し、地域活動団体が実施する行事や地域活動に関する情報等を掲示することによって、地域における住民の情報共有と交流の促進を図ることとなりました。

昨年度、モデル的に２小学校区で設置され、はぐくみネット（小学校区教育協議会）を中心に、地域振興会（自治会）やＰＴＡ等による地域組織に運営を委ねられています。

ＩＴ技術が進む社会で、横幅約３ｍの巨大な「まちかど情報板」が、地域の方々の積極的な活用により、地域のコミュニケーション力を向上させる新たな媒体になればと考えております。

横幅約３ｍの巨大な「まちかど情報板」

アルパック(株)地域計画建築研究所
Architects　Regional　Planners & Associates・Kyoto
http://www.arpak.co.jp　E-mail info@arpak.co.jp

本　　社
京都事務所　〒600-8007　京都市下京区四条通り高倉西入立売西町 82　TEL(075)221-5132　FAX(075)256-1764
大阪事務所　〒540-0001　大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F　TEL(06)6942-5732　FAX(06)6941-7478
名古屋事務所 〒460-0003　名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 6F　TEL(052)202-1411　FAX(052)220-3760
東京事務所　〒160-0001　東京都新宿区片町 1-6 萩原ビル 3F　TEL(03)3226-9133　FAX(03)3226-9560
九州事務所　（株）よかネット　〒810-0802　福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F TEL(092)283-2121　FAX(092)283-2128